



慶應義塾大学ビジネス・スクール

静岡県立静岡がんセンター

5

—多職種チーム医療の院内連携から地域医療連携の構築まで—

「国立がんセンター時代に重視していた研究指向とは異なり、地域に根ざした患者さんの視点を重視したがんセンターを作り上げようと考えていました。cure（治療）は、世界でトップレベルの国立がんセンターの設備・技術を導入しました。また、care（ケア）の実践のための多職種チーム医療は、海外の事例を参考にして、日本に馴染むように工夫しました。」（静岡県立静岡がんセンター 山口建総長^[1]）

10

静岡県立静岡がんセンター（以下、静岡がんセンター）は、静岡県東部の駿東郡長泉町、富士山麓の東名高速道路沿いの丘陵にある^[2]。静岡県が1995年度から計画を進め、2002年に開設した高度がん専門医療機関である。北に富士山、南に天城連山、東に箱根・十国峠、西に駿河湾を望む131,048㎡の広大な敷地に、地上11階・地下1階の病院本棟、緩和ケア病棟があり、38診療科、615床のベッド、最新の放射線治療である陽子線治療装置を擁している。病院本棟と緩和ケア病棟の前庭には、「患者さんの心」を大事にするという目標を意味した大きなハート形の池、池に通じる川、イングリッシュガーデン、1,600本のバラ園が配置され、自然、緑と水と光に囲まれたガーデンホスピタルである。

15

20

静岡がんセンターは、各種メディアで「全国病院ランキング」など企画があると、がん治療の分野で常に上位に名を連ねている^[3]。地方都市でありながら、東京、大阪といった大都市の病

25

^[1] 山口氏へのインタビューから（2009年11月実施）。

^[2] 連合総研レポート（2004）「現代福祉国家の再構築シリーズⅡ」。2004年9月号。p26。

^[3] もっといい日編集部（2008）「治療最前線 高い評価となって現れ始めた医療実績—富士山麓から世界レベルのがん治療を発信 vol.138」週刊がん（日本医療情報出版）HP。【2010年2月アクセス】

本ケースは慶應義塾大学大学院経営管理研究科 中村 洋教授指導の下、末吉総一郎（M31）が作成した。本ケースは経営管理に関する稚拙を記述したものではない。ケース作成に当たってご協力頂いた静岡県立静岡がんセンター 山口建総長、大田洋二郎医師、丸茂江以子総長補佐官に感謝と御礼を申し上げたい。

本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクール（〒223-8526 神奈川県横浜市港北区日吉4丁目1番1号、電話045-564-2444、e-mail: case@kbs.keio.ac.jp）。また、注文は<http://www.kbs.keio.ac.jp/>へ。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、いかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またいかなる方法（電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない）による伝送も、これを禁ずる。

30

Copyright© 末吉総一郎、中村 洋（2011年7月作成）